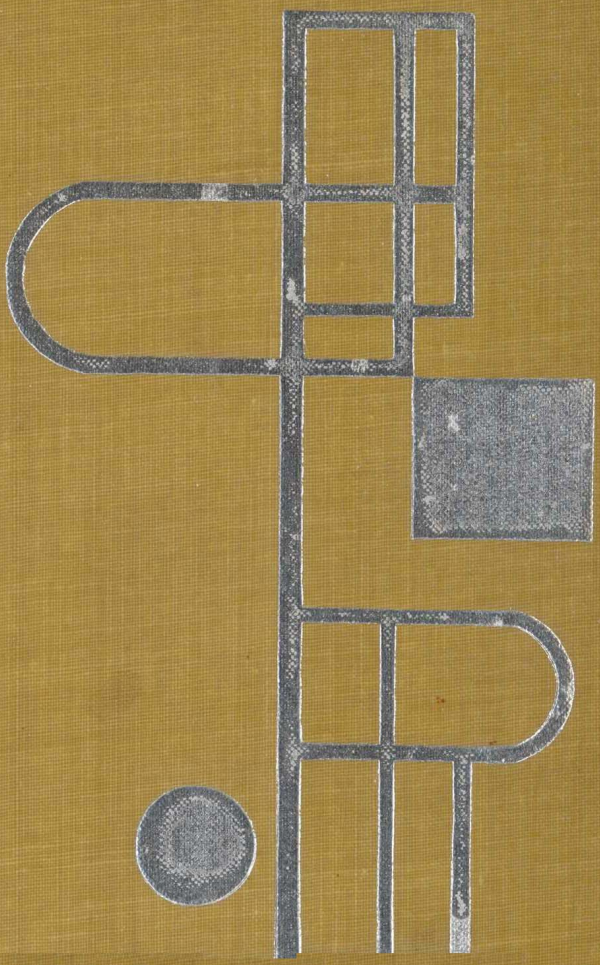


昭和小說集（一）

現代日本文學全集 86

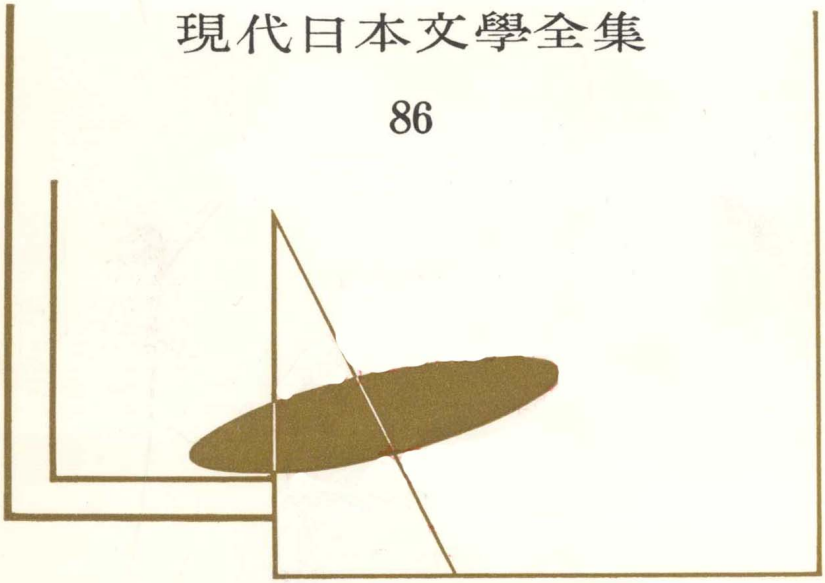
昭和小說集

(一)

定本限定版

現代日本文學全集

86



筑摩書房版

定本限定版　現代日本文學全集　86

昭和小說集（一）

昭和四十二年十一月二十日　發行

著代表者　立野信之

發行者　東京都千代田區神田小川町二ノ八　竹之內靜雄

發行所　東京都千代田區神田小川町二ノ八　筑摩書房

電話　東京（四）七六五一（代表）
振替　東京　四一二一三
整版　株式會社精興社
印刷　多田印刷株式會社
製本　山晃製本株式會社

昭和小説集(一)　目次

富ノ澤麟太郎
流星……五
今東光
痩せた花嫁……一七
片岡鐵兵
綱の上の少女……二七
愛情の問題……三六
里村欣三
苦力頭の表情……四八
池谷信三郎
橋……五四
黒島傳治
櫂……六六
渦卷ける烏の群……七四
久野豐彦
ポール紙の皇帝萬歳……八六
立野信之
軍隊病……九二
高橋新吉
豫言者ヨナ……一〇三
龍膽寺雄
アパアトの女たちと僕と……一一〇
岩藤雪夫
ガトフ・フセグダア……一二〇
犬養健
亞剌比亞人エルアフイ……一五一
佐左木俊郎
熊の出る開墾地……一六一

深田久彌
オロッコの娘……一七三
あすならう……一七七
芹澤光治良
ブルジョア……一九〇
下村千秋
天國の記錄……二一三
須井一
綿……二三八
淺原六朗
混血兒ジョオヂ……二六七
藤澤桓夫
大阪の話……二八二
和田傳
村の次男……二九九
橋本英吉
欅の芽立……三二一
伊藤永之介
鶯……三三六
岩倉政治
稲熱病……三四三
保高德藏
或る死、或る生……三六三
森山啓
遠方の人……三七五
解說……四〇三
年譜……四一九

裝幀　恩地孝四郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

昭和小說集

(一)

流星

富ノ澤麟太郎

一

四月の夜の匂ひは、果物店から縦横無盡に星空へ向つて放散してゐた。

「シネマ東京」が午後十時頃に閉館すると、その界隈はひとしきり賑はつた。さうしてそのあわただしい雑鬧のなかに、そこを出た幾人かの人人は、消え失せたスクリーンの上の青白い幻影をもう一度再燃するかのやうに、表の繪看板を見上げてゐた。しかしその人人とても、シネマホールの顔ともいふべきその前面を飾つてゐる花電燈が消えるとともに、薄暗い紫色の夜の光のなかへ水泡のやうに消え込んでしまつた。

「青い花の家」の裏口から痩せた若々しい婦人が、庭傳へにその家の外廓である要冬青垣の外へ野犬のやうに忍び出た。彼女の鼻先には未だにシルバーリーブドクリムスンシクラメンの香氣が漾うてゐた。花床を掠めてくる微風は、彼女の肌を着物の上から輕くまるやかに撫でてゐた。

彼女は十時の聲を聞くまでは、店先きの花の香に醉うてゐた。――彼女は外見では落着いてはゐたが、内心では少なからず困窮してゐた。彼女はけふ一日その苦い煩悶を避けるために、殆んど店のなかでのみ暮した。さうしてその約束された時刻の來るまで、彼女はシクラメンのなかへ顔を埋めて泣いてゐた。

今彼女は夜の戸外へ出たものの再び考へ直して内へ戻らうかとも思つた――が、彼女の心は秤にかけられたまま水平にはならず絶えず動搖してゐた。

ものの影とも間違へるほどすばやく「シネマ東京」の樂屋口を飛び出た者があつた。その人物はファッショナブルシャアプのすばらしい洋服につつまれ、小脇には箱に入れたヴァイオリンを抱へ、軒に沿うてひしやげた十字街へ出ると、その一つの角である果物店の明りを避けるやうにその前で拋物線を描いて北の方へ進んで行つた。軈て五間ほどの長さの木橋へさしかかると、彼の歩みは平靜な足どりになつた。彼は口笛を吹いた。さうしてちよつと橋の下を覗いて見た。川といふよりも溝といふべきその水は、流れてゐるとも見えないが、微風に刻まれる泥水の上へ星を鏤めてゐた。彼は顔を少し傾けるやうにして微笑んだ。彼の彈み上る様子は、輕快な馬の足どりに似てゐた。高臺から這うてくる微風は、ほつそりした彼の軀を抱くやうにしてじやれついて附纏うてゐた。

「ウキリアム、テル」のマーチが突然止んだ。若葉の匂ひが、微風に溶けこんで漾うてゐた。彼女は立木のやうに顫へて、要冬青垣に沿うて少し後退りしながら前方を注意して見た。夜氣は薄暗い紫色に浮いてゐた。土を踏む靴音が、蟹の這ひ寄るやうに響いて來た。

ヴァイオリンを抱へた人物は、空いた右手を元氣に打ちふりながら彼女の方へ突進して來た。彼女は彼の腕に抱きしめられることを豫想して、顔をそむけたまま垣根について二三歩引きさがつた。女のそんな素振を見た男は、ちよつと立ち止つて女の顔が向けられてゐる方を性急に覗き込んだ。が、彼は直ぐしまつたと思つたので、急に落着いた態度を見せた。

「よく待つててくれた、ありがたい、糸子！」

彼は半ば前方に腰を折りながらせきこんで言つた。

彼女は彼とすれずれになるのを妨ぐやうに左肩を斜に突き出した。

「何故こんなことをするのです。」

彼女の聲は鋭い刃物のやうに彼の顏面へ切りかかつて閃いた。彼は彼女の言葉を豫想してゐたもののやうに、ちよつと眉をせはしく微動させた。彼は彼女を抱かうとした。彼女は聲を殺しながら彼の右手を強く拂ひ退けた。彼は鼻先きを突きたてて笑つた。彼女は急にむつと怒つた態度に變つたが、それの無益であることを感じて、以前よりはもつと極だつた一種の威風を示しながら優しく氣を取り直した。

「待つてたわ、三浦さん。だつて私あなたにお願ひがあるの。呼び出し狀など書くのは、一たいどんな考へからです。私困るわ——小汀だつて、これが解つたら惡い氣持を隱せないでせう。」

「小汀のことは人から聞いて知つてる——小汀はお前を苦しめてるだらう。それは嘘か？」

「いいえ、怒りぽいわ、でもいいひとです。病氣なんですもの——」

「何だ——病氣は？」

「何でもいいぢやありませんか。」

「理窟づめに怒りぽいな。」

「いいえ、いいひとです——でも、あなたは今夜のやうなことをして、私をどう苦しめなさるのです。一たいどんなことです？」

「糸子、お前の暮しがどんなふうか見たくもあるさ——不機嫌で氣むづかしい人のところで」

「あなたはだしぬけに何處から來たのです？」

彼女は男の横頰を思ひ切つて打ちのめしてやりたかつた。花床から輕く舞ひ登る豐麗な香氣は彼等の頭上でゆるやかな渦を卷いてゐた。

「怒つてるのか——淺草から逃げたよ、あの地震の時にね、そして神戸へ行つてた。今は直ぐそこのシネマ東京の樂手さ——」

「死んだのでなくて——」

彼女は半ばまで言つて、ちよつと物を考へるやうに口を噤んでしまつた。

「惡かつたかね。ふむ。お前はおれを待つてたのだから、おれはおれが考へてたやうに思つてみたいが、不親切だよ。」

突然彼は女の手を握つた。

「放してよ。」

彼女は肩をすぼめながら握られた手を振り切つた。

「あなたはいつまで私をあなたにくつつけて考へてるのです？——例ひ一度はお互に愛し合つたとしても、今はその時とは全く違ひます。」

彼女の聲は少し震へてゐたが、その態度は平靜で、頭髪の一すぢさへも亂してはゐなかつた。

彼は半ば悲しげに首を振つた。さうしてすでに彼の鼻高な顏からは、快活と微笑とが消え失せてゐた。が、皮肉な微笑で唇を歪めたまま直ぐ陰鬱な顏に變へて言つた。

「おれはここから一町とは離れてないところに住んでゐる——また會へるのだね、きつと——彼奴のやうな氣むづかしさが感染してない時に——」

「誰が——あたりまへの方法でだつて會へるぢやありませんか。卑怯な——あからさまに店から這入つてらつしやいよ。」

「お互に氣を惡くするやうな言葉を見つけ合つてたつてはじまらない。そんな智慧があるなら——明日でも會はう。」

彼は囁くやうに言つて、彼女の手を握らうとした。それを感じた彼女は佇んでゐるままで手をひつこめた。彼はそんな行爲を彼自身がしなかつたやうに、しかも極めて慇懃な態度で半ば天空を見上げた。

「いやです。何だつてそんなに困らせるのです。私のことなどはすつかり忘れて下さい。ほんとうに後生ですわ。」

「お前は待つてたのではないのか。」

彼は再び彼女の顏を盜んで言つた。

「別れの誓ひをたてたかつたから——」

「嘘つけ、ウヰリアムはどうしてゐる？」

「あなたに係りはありません、あの子は。」

「ふむ。一度は親になつた。」

彼は荒々しく言つて、泣き出してゐる彼女の腰を無理に抱へてその頰へ接吻した。彼女は軀を刻みこむやうに顫はしながら、恥と苦痛と後悔と失望とのなかに苦い涙を濺いだ。彼女は直ぐ氣を取り直した。次の瞬間、男は彼女に突き飛ばされ、蹌踉いて倒れた。

地面から燃え上る火のついたやうな男の笑ひ聲のうちに、彼女は小刻みに足を運び、幾分か前蹋になつて、その背中には和らげられない悲哀と憤怒とを背負つてゐた。

男の馳けて行く靴音は、彼女の耳へ風に飜られる横帆のやうに突き射つて來た。軈てそれは脅迫と哀哭との鈍い囁きに變つた。男は勝誇つた騎士のやうに薄闇を突いて消え失せてしまつた。

彼女は家の方へ通ずる小徑へ踏み入つた。彼女は默々として項垂れてゐた。花床は、薄暗い紫色のなかに溶けこんで水の流のやうにほの白くひろがつてゐた。さうしてその一樣に乳白色に浮き上つてゐる花床からは、豐麗な香氣がそこら一面へ靄のやうにたてこめて搖れてゐた。

彼女は花床の周圍を巡りながら、袂の端で兩頰へ澪れてくる涙を輕く押へた。

彼女は店の方から家のなかへ這入つた。彼女の軀は旅疲れしたやうに重苦しかつた。彼女は奥の間へ注意した。

彼女は今にも奥の間から聲をかけられるやうに感じた。彼女は靜かに茶の間の柱時計を見上げて店の方へ出た。さうしてなるべく音のしないやうに戸じまりをした。そのために店のなかは一層明くなつて、イルミネイションでも點したやうに輝いた。彼女はそのまばゆい明りの下へ彼女自身の姿を曝すのは氣恥しいやうに感じた。彼女は瞬間的にそんなことを考へながら力を入れるやうにしてスヰッチを切つた。店は花の香に滿ちた薄暗い闇に變つた。

再び茶の間へ引き返した彼女は、彼女自身で心苦しい一種の不安を感じてゐた。奥の間に寢てゐる良人に呼びかけられたなら思はずまごつきさうに感じられた。さうして彼女は先刻の落度を心配しないこともなかつた。店の者の歸つたあとでもあつたので、彼女の留守の間に客は來はしなかつたであらうか。今良人の言葉のない以上は、そんなこともあるまい。しかし次の瞬間に彼女は大膽になつてゐた。この店の習慣として、夜分になれば一度は必ず庭の方を巡廻する。さうしてそれが此頃のやうな花卉の季節であれば一層怠つてはならない爲事の一つでもあつたから。

「お休みになつてて？」

彼女は茶の間を退いて、奥の間へ這入るなり良人へ呼びかけた。返事はない。彼女はほつと溜息を漏らした。

彼女は牀へ横になると、直ぐ氣輕な氣分を味はつた。しかしそれはしばらくすると、氣に入りの詩でも朗誦するやうに一種の興奮を伴つて高潮して來た。彼女はぢつとして横になつてゐるのがもどかしいほど苛立つ胸騷ぎを感じた。が、それをどうすることも出來ないと思ふと不甲斐なく思はれた。さうして彼女はパンに歎み、少女らしいつつましやかを知る昔のことが思ひ出された。

二

彼女は朧げながらも光り輝くこの「青い花の家」の主婦になるまでは、十中七八までの婦人のやうに樂しい少女時代を送り、骨も折らずに、女としての美と愛とつつましやかと清澄と怜悧とによつて、ここまで登りつめたのではなかつた。

彼女は横濱の場末で、親なし兒として貧困のなかにその少女らしくなりかけた時代を送つてゐた。彼女はそこで或老人の世話になりながら、ストローの選り別けをしたり、造花を作つたりして一日の食物の財元を拵へてゐた。さうして手で働いたものが、直ぐ口のなかへ這入るといふやうな貧民窟の生活は、彼女の天性の美をかなり奥深く隱してゐた。

或日彼女は街角で會つた見ず知らずの外人に、街の名前とそこへ行く順序とを訊ねられた。その時彼女は、外人の子供らしい日本語のアクセントに半ば微笑みながら、はつきりとしかも少女らしい含羞みをつつましやかに軀全體の動作に現はして應へた。

彼女にとつてこの異樣な出來事は、偶然にも意外な結果を生んだ。その外國人は、彼女のつつましやかな言動とその楚々たる容貌とに心から動かされて、外國人らしい好奇心と金持の氣まぐれとから彼女を育ててみたいと彼の心に問

うた。さうしてその外國人は、彼女を引き取ることに決心した。

その年、彼女は驕て十六歳にならうとするクリスマスの夜に、その外國人の許へ養はれることになつた。

彼女は可憐なしかも落着いた少女になつた。彼女は半ば驚き乍らも平和な家庭の人となつた。彼女は滿足した。彼女の性格は悅びそのものにふさはしいやうに無邪氣でもあつた。

彼女の心は滿足して悅びに顫へた。

彼女は富に退屈を感じなかつた。

彼女には品位と洗煉された落着とがそなはつた。

彼女は彼女自身の貧困に苦しんだ過去のことを忘れはしなかつた。が、それは夢のなかの出來事のやうであつた。

彼女が十八歳の春であつた。——

彼女は彼女自身の保護者と結婚した。彼女は女らしく心から滿足した。平和は二人の上に輝いた。彼女の心には新らしい記憶が一ぱいに滿ちた。さうしてその結婚後、七ケ月目に、彼女は一人の男子を分娩した。

彼女は良人のハーランドを信じてゐた。彼は彼女の愛情を受けるに足りるほどの人柄であつた。

——

その次の年のクリスマスの第四夜に、彼等の子は微笑むやうになつた。

天井裏を鼠が突然に馳け過ぎた時、彼等の小さなウキリアムは泣いた。

"Bah, Don't cry Bill!"

ハーランドは半ば笑ひながら、妻の腕に抱かれてゐる子を横あひからあやした。

二人の生活は樂しく平和であつた。親密な愛情は、廣間の片隅で幸福を撒きちらしてゐる鸚鵡の口眞似にまでのぼつた。

"Bah, Don't cry Bill!"

「何に敗けるものか!」

世界大戰の開始された頃の或日、彼女はハーランドの强い怒り聲を聞いて、恐ろしい深い一息を吐いた。

ハーランドは三十前後の獨逸系の亞米利加人であつた。

或朝彼女は寢牀のなかで跳び上つて、ウキリアムを抱きながら啜り泣いた。彼女は柔かい子を抱きしめたまま何事も言はずにしづかに泣いた。さうして彼女はすべてが何でもない夢であることを望みながら、二晩も家をあけ切つて、彼等の話相手にはなつてくれない良人のことを思ひつづけた。

——

そのうちに一人の女中は逃げ出した。

ハーランドの商館は閉鎖された。

街は驟雨のやうに喧噪した。ホテルの前は人の群で埋まつた。それを通行人が十團二十團に取り圍んだ。

彼女は兇猛な妬みを感じたと同時に彼女の上に降りかゝつて來た不幸を嘆いた。さうして彼女は、ウキリアムを抱きながら宣戰布告の號外を引き裂いた。

彼女は長い間、良人からの便りを待つた。

彼女の幸運は、涙とともに跡方もなく掃き去られてしまつた。

彼女は長い間、良人の歸宅を待つた。

彼女は胸の底から湧いてくる動悸に戰いた。

富は彼女の軀へ古い記憶の烙印をやきつけたまま燃え切つてしまつた。

彼女の望むものは、子をしつかりと胸に抱きしめる愛であつた。

彼女は或レストランのウキトレスになつた。

彼女の求めるものは富であつた。ざくざくと鳴りひびく銀貨であつた。

彼女の顏は脂粉に輝いた。鏡は彼女自身をさへびつくりさせた。

彼女は立派な姓や名譽を欲したのではなかつた。彼女は獨り彼女自身で恥ることもあつた。彼女は彼女自身が墮落したのであるとも考へた。さうしていづれは何時か何處かの片隅へぼろを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

纏うたまま投げ出されてしまふのではあるまいかとも考へた。

青い光芒のなかに無數の目が時々閃いた。

彼女は腐敗の氣に染むまいとして、彼女自身の胸をしつかり抱きしめた。

彼女は現實の前では心の誓を失ひがちであつた——彼女は生存の影にひきずられてゐた。

「そおら、ゼリビンズ——ウキリアム、あなたはいい子です。お母アさんは、昨夜も遲れたのね、堪忍してね」

赤や白のゼリビンズは、彼女の兩手から茶碗のなかへ寶石のやうに音をたててこぼれた。子は青白い頰へ半ば輝く涙を顫はして小さな手を拍つた。

齒輪は廻つた——噂は跳ね飛ばされて礫のやうに碎けて散つた。

彼女の指には贅澤な指輪が輝いた。彼女はO座のセコンドヴァイオリニスト三浦と婚約した。

三浦は混血兒であつた。彼の父系は伊太利亞人で、祖先代々からの貿易商であつたが、彼は見知らない父を夢見ながら、由あつて母系を名乘つてゐた。

三浦と糸子との生活は、親密な情愛を十分に持つてはゐなかつた——彼女はさうではないと思つたが、——彼女は幸福ではなかつた。三浦は青年らしい快樂に滿足してゐた。その性格がまたそんなものに滿足する程に懶惰なものでもあつた。

彼等は別れた。

一年又半の生活を、一瞬の出來事の結果でもあつたかのやうに——

彼は何時もの惡習に馴れて、彼女へ爪をかけただけであつた。

彼女にとつて、彼との生活は、恥と墮落との噂を、世間へ向けて、極端に想像させたに過ぎなかつた。

ウキリアムは色の蒼ざめた、目の窪んだ子になつた。さうして彼の着てゐる白い地に赤毛糸でふちどつたジャケツは、その頸のところがそんな細い痩せた頸が二つも這入るやうにたるんでゐた。

さうして彼女が、東京へ出る一週間前に、ウキリアムは貧乏な子供等が命をとられるあの急性胃腸カタルで死んでしまつた。

彼女は東京へ出ると、嘗て自分の經驗が敎へた爲事にたづさはつて、青白いシャンデリアのなかに、悲しい顏を脂粉に塗りつぶして笑ひ得ざる微笑をたたへながらその哀れな繪姿を、喧噪と音樂と酒とビフテキとのなかに曝した。

三

小汀は店頭からちらりと見える茶の間と廊下との間に籐椅子を据ゑて、卷煙草を燻らしてゐた。彼は重苦しい氣分から解放されて、春らしい夜氣にすがすがしい長閑さを味つてゐた。遲い夕食を取り、しばらくぶりで口にしたポートワインが、彼をそんな珍らしい氣持にした。彼は彼自身でも珍らしいことであると思つた。この「青い花の家」の春は、すでにスキートピーやシクラメンから賑ひはじめてゐたのであつたが、少なくとも彼だけは肉體までも食ひつくすやうな腦に侵されて、けふといふ今夜までそんな春らしい氣分には到底なりきれないでゐた。

けふ彼は夕方になると、ふとした不安から花壇の奥に設けられてある養魚場へ行つた。彼はそこの金魚をつくづく覗いて見た。すでに店の方へ金魚を陳列はしてあるものの、一通りは試驗的に見て置かなければならないと思つたからであつた。——彼は妻には内所で、そつと牀を離れて養魚場を見て、花壇まで一巡して來た。

それ以來彼は大へんに氣分がすぐれて來るやうに感じた。こんなにも突然に幸福らしい彼になつて來たのを悅ぶ者は彼一人ではなかつた。妻は良人が椅子に腰かけてゐる姿を見つけた時は大仰に叫んだ。

「まあ、どうなさつたのです？」

さうして彼は妻が持出した坐布團をあらためて腰の下へ敷きながらかすかに微笑んだ。すると彼女は今まで隱してゐたものを見せびらかすやうに聲をたてて笑つた。

彼は妻の笑ひ聲を耳の遠くの方で聞きながら、今しがたシネラリヤやシクラメンやチューリップやプリムラやグロキシニアやロベリヤやパンジーやガーベラ等の香氣に咽せ返つて、花床の小徑でよろよろしてしまつたことを思ひ出して、くすくすと忍び笑ひをした。彼女は彼女で、良人の氣分のいい姿を見て、心から微笑んだ。

彼等が結婚してから三年にもなるが、絕えてこんなことはすべて珍らしいことであつた。男も女も共に氣樂な生活を暮すことは、不贊成ではなかつたのであるが、どうしたものか人に隱れるやうに寂しい生活を欲した。それといふのも彼が一種の興奮から肺に關する研究をつきつめるために醫學を選んだが、その中途でその希望を斷念しなければならない腦病に侵された。その加減であつたかも知れない。——彼女にしても人生に對しては、特に男性に對しては燃えるやうな憎惡を感じてゐた。この感じを深く感ずれば感ずるほどそれを腦の奥深くへ隱さうと骨折らなければならなかつた。さうしてその感ずる程度を顏へは表したくないと思へば、しぜん人の目には厭な姿に映つても冗談などは藥にしたくも持合せてはゐないやうな態度で氣むづかしくしやんとしてゐた。これは良人の氣むづかしさから受ける罪は十分にあつたとも言へるが。——

彼女の良人は三十にもならない青年であつたが、一見すると三十五六には見えた。皮膚の色が灰褐色で、骨々しい顏は、かなり鼻梁の張つた鼻で二分されてゐる。その各々が一つづつの尖つた眼を光らせてゐた。光るといつても、それは濁つた光り方である。どちらから見ても彼には常に元氣の持合せはなささうである。さうして彼は心の入口へしつかりと錠を卸してゐる。彼は必要以外のことは喋らない。それにしても、彼は世間へ向けて憎惡を持つてゐるのではない。彼はただそんなふうにぢつとして、何も喋らずにゐるのが好きなのである。彼には獨りで微笑む癖があるのを見ても、そのことは解る。それは故意に微笑むのではない。が、彼はその時心のなかの彼と何事かを話し合つてゐるのかも知れない。彼だつて種々雜多な事は考へてゐるのだから——彼は內心には樂しい獨樂を廻してゐるに違ひないのである。

彼等は結婚すると間もなく、この廣大な敷地を購入して、花園を作り花卉の賣買をはじめ、その次の年からは庭の奥にある沼のやうに大きい池を利用して養魚場を設け金魚の飼養をはじめた。この商賣は彼に一番適してゐるらしかつた。さうしてその他には、白ペンキ塗りの店を開いて「青い花の家」と看板を揭げた。さうして店のことは一つさい妻の受持にまかせた。彼女は本氣で勢だして店の方を綺麗にする。店をじだらくにしたことはただの一度もない。若しも店が取り散らかされてあるとすれば、忙しい時でもあつたらう。が、彼女は花や草がちよつと取り散らかされてあることについては、かなりの自信をもつてその效果を知つてゐた。なる程そのやうなことは見て見榮のしないものではない。しかし彼女は十分注意して店のことは綺麗にする。さうしていくらかの暇を見つけ出しては、熱い珈琲でも上手に煮るのが無上の樂しみである。

彼女は三浦の出現をかなり恐れた——彼女は良人に對して三浦のことを闡明にする必要があると思つた。彼女は暗い胸の惡くなるやうな恐ろしさに戰いた。彼女は三浦の出現を災難として諦めなければならなかつた。彼女は小汀に對して三浦との關係をどんなふうに說明していいのか迷はなければならなかつた。良人が病人であるといふことを第一條に設けて、昔の彼等の關係を良人が得心するまで說破するには十分骨の折れることであると思つた。正直にといふことが、彼女の心の全部を占めるまでは三分の時間を待たなかつた。それにしても小汀は彼女の前生活を言はず語らずのうちに十分に知つてゐる筈であると思へば、心强くないこともなかつた。何故なら小汀と彼女との結婚の最初に於いてそんなことは、相方が十二分に打ちとけ合つてゐた筈であつたから——增して彼がレストランなどへ出入してゐた以上は——こんなことが、

彼女の心頼みになる唯一のものであつた。

それにしても彼女は三浦のためにむざむざと幸福を奪ひ去られてしまひさうでならなかつた。彼女は彼女自身の良人へ向けて行く考へが、何となく餘り獨り合點のやうに思はれてならないと瞬間的に感ずることもあつた。さうして彼女は、以前三浦とはつきりした言葉を取りかはして別れて置かなかつたことを非常に後悔してゐた。

彼女は良人へ三浦のことを打ちあける機會を失つてゐた。——彼女は三浦と會つてから三日も過ぎた晩、牀のなかで、良人へ話しかける機會を覗つてゐたが、良人の機嫌のいい心を亂したくないと思へば、一たいどうしていいのか迷はない譯には行かなかつた。

——

さうして彼女は、今年七歳にもなつてゐた筈のウキリアムさへ生きてゐたならきつとこんなことは持上がらなかつたらうにと考へる。あのウキリアムは、三浦のことを舌の廻らない言葉で、何と言つたらう——「酒のみのをぢさん！」——あの子さへ生きてゐたなら、何ごともなく昔の夢に見たやうな貧乏な生活に立ち返つて、直ぐそれに馴れてしまひ——

「そんなことは嫌です！」と、今彼女は彼女自身の心のなかの彼女へ叫びかけた。かういふ彼女の心のなかには、時間といふ觀念もなくなつて、その一人子なるウキリアムが美事に成人して立派な紳士になつてゐた。さうして彼は彼自身の母のためにあらゆる艱難と鬪つて來たしるしにその掌には胼胝が膨れあがつてゐた。さうして彼は若い青年紳士の言ふやうに、

「お母さん、僕はどんなに人生に對して興味を持つてゐるかを知つて下さいますか。」と言ふのである。さうして彼は胸のうちでは泣いてゐる。——「子供は親を選擇する權利は持つてゐない。罪！　罪！　全く罪もなく生れた子供は、法律とか社會とかのために冷遇される。」——彼女はここまで彼の聲を聞くやうに感ずる。さうして、彼女も成人したウキリアムの異人種的な樣子に半ば驚きながら、——「だつて、結婚は人生の盛典です。そのためにどれ程私は身の碎けるやうな代價を費したことだらう。ウキリアムやお聞き、お母さんはね、退屈はしなかつたよ。」——彼女がかう言つてゐる間に彼女の一人子は、彼の父が嬉しさうに彼女を眺める時にしたやうに、指をぱちぱち打ち合つて小唄を歌つてゐる。こんな時にひよつこりと、ハーランドが戰爭から歸つて來る。ウキリアムは彼の見知らない父を見て——「誰です？」と叫ぶ。さうして泣き崩れてゐる母を支へながら、半ば睨みつけるやうに、彼の見知らない父を見詰めてゐる。——「誰が、誰が、罪は誰にもない。私はもう誰とも係りあひたくはないのです。」——彼女は彼女自身の聲にびつくりして、牀のなかで目を醒した。さうして彼女はどつとこみあげて來る涙のなかから、瞬間的にではあるが、三浦との會見のことをまざまざと目前に思ひ浮べるのであつた。彼女は首をぶるぶるツと顫はしながら擡げて、氣のついたやうに良人の寢牀の方を注意する。良人はこのごろの氣分のいい生活に全く馴れ切つたものか、晝間の輕い疲勞に音もなく眠り入つてゐる。彼女はその樣子を見てほつとする。良人に對して申譯ないといふ氣持から何となく心が重くなつて、心臟がこまかに動悸する。彼女は祕密を抱いてゐると思ふ。實際彼女の持つてゐるものは祕密であるに違ひはない。彼女には重過ぎるものだ。こんなにも善良でか弱くしとやかな少女らしい昔の彼女には可哀さうすぎる重荷である。さうして今彼女が長いこと忘れかけて奥深い胸の底の方へしまひこんで置いた彼女自身の一圈の絃のはしくれは、いたづらなヴァイオリン彈きにちよつと觸れられたばかりに、とめどもなく鳴り出した。彼女の過去は怪しげな恰好をして、彼女の目前へ口口に滑稽なしかも涙もろいことをかこちながら押し合ひへし合ひして蹌踉いてゐた。

四

店は一ぱいの朝日をうけて花の香を漲らしてゐた。小汀は彼の眞白な色の店へ出て、棚を覗いてみたり、ガラスの金魚鉢を置き換へてみたりしてゐた。その傍ら彼は片隅のところへ椅子を据ゑて讀書に耽ける。何とも言へないのんびりした氣分である。さうしてぽかぽかと浮立つ樣な春である。彼女は花鉢の陰になつたり、紅

色の花房の後ろに現れたりして、半ば微笑み、半ば不安氣に彼の前後を行きつ戻りつして立ち働いてゐた。そのうちに店の者も出揃うて、「青い花の家」は一層賑さを增した。が、誰も喋る者はゐない。不氣味なほどしんとしてゐる。誠に春の朝の野邊らしく新鮮な香に一ぱい充ちてゐる。狹くて鬱陶しいやうな氣分は微塵もしない。日に照らされたものがみな光のなかへ溶け込んでしまひさうでもある。

客が見える。女學生連である。彼女等はお互に囁き合ひながら棚をゆつくりと眺めてゆく。さうしてその歸りには切花の百合を求めてゆく。遠くの方で子供の泣き叫ぶ聲がする。

「糸子！」と、言ふところを三浦は危ふく呑み込んで、カラーの前を指先きでもぢもぢさせながら、「青い花の家」の片隅に讀書してゐる男を見る。さうしてその眼を直ぐ笑ふやうにして彼女の方へ向けた。店の者は靴音を聞きつけて一樣に入口を見る。すぐれた美しさの男が、すばらしい服を纏うて佇んでゐる。

彼女は突然小衝かれたやうに動悸がして、鉢の陰へ小さくなつて震へた。彼女の眼はすばやく店の片隅の方へ走つた。良人はゆつたりと椅子に靠れて新聞を捧げるやうにして讀んでゐる。が彼女には、彼がその新聞紙を屏風代りにしてちよいちよいこちらを覗いてゐるやうに思はれてならない。彼女にはその時三浦の出現がそんなにも長い時間を費してゐるやうに思はれた——彼女には數日以前から三浦とは會ひつづけてゐるやうに思はれたから——

三浦は彼女のところから少し離れて、笑ひたいやうな顏を嚙み殺してゐる。時折は半ば氣のついたやうに小汀の方を盜み見しては、彼女のまはりをぐるりぐるりと巡りながら花の香を嗅ぎ廻つてゐた。

「これはどうです？——」

突然、三浦はかう言つて、白いガーベラジャミソニの鉢を指してゐた。彼はその鉢を求めるといふのではなかつた。——「これはいい花だ。一つ貰つて行くかな！」——と言ふところであつたのだ。が、彼はその場には移らない彼自身のうつかりした氣持に奇妙にもあせつてしまひ、思はずその一輪を手折つて、それを胸のところのボタンホールへ挿した。さうして彼は彼自身の方を見てゐる小汀の顏を感じながら、見ぬ樣子をして彼の片隅の方を盜み見して、

「やあ、これはしまつた！、御免なさいよ、ガーベラさん！」と、優しく言つて、彼女の方をずるさうに睨めたまま齒をむき出して大聲に笑つた。

店のなかは一瞬しんとしづまつた。

「珍らしい花が澤山咲いてますな。」

彼はてれ隱しのやうに小汀へ話かけた。小汀は唇を歪めて苦笑ひしながら首を振つて輕く應へた。さうして彼は椅子の脚をきゆきゆいはせながら立ち上つて、三浦の方へ近寄つた。

「お氣に召したのがありますか。」

「ええ、どれもこれも——」

三浦は受答へしながら、チョッキの右のポケットへ拇指を差し入れて、彼女の方をじろりと見て眞面目な顏をした。さうして彼は胸の上のガーベラをふし目に見て、その匂ひを吸ふやうにちよつと鼻を鳴らした。彼の突き出た鼻は異樣に顫動した。

彼女は良人に店をまかせて、庭の方へ出ようとしたが、良人に呼び止められてしまつた。その時、何故か彼女はぎくりと胸を貫かれたやうに感じた。

三浦は庭の方を見たいと言ひ出した。小汀は少し眉をせばめたが、直ぐ承諾した。

店は彼女一人になつた——彼女はその軀が、下へ下へと沈下して行きさうに感じた。さうして彼等が言ひ合つた會話の一つ一つが胸へ應へて、燃え上つて來た。彼女は良人が三浦と知り合ひであるかのやうに思ひ做された。さうして彼女の心を試すために、彼等は相談の上、彼女自身を困らしてゐるのではないかと空想してみた。彼女にはそんなことがあり得よう筈がないと思へるが、どうしたはずみか彼女は今彼女自身へ降りかかつてゐる不幸をそんなふうに描いてもみた。かう考へて見ると、彼女には良人の心が少しも解らなくなつて來た。彼女は彼女自身で拵へてゐるのであるとも考へるが、今はそんな氣休めを空想してゐられない羽目になつてゐると思ふ。

彼女は何もかも好く考へて見なくてはならな

いと思つた。さうして良人へ對して、何もかも打開けなければなるまいと思ふ。しかしこんなふうに考へるものの、良人の病氣のことを考へると彼女の心は鈍りがちにならざるを得ない。彼女はどう處置をつけていいのか解らなくなつた。丁度それは水銀のなかへ銀が迷ひ込んだやうなものである。少しも纏りはつかない。彼女は自分で吐き出す息の音さへ空恐ろしいやうに感じた。さうしてどちらかへ少しでも動くものなら、その身は深い、暗い、奈落の底へ落込んで行きさうな氣持がする。彼女は氣味の悪い夢に魘されてゐるやうに感ずる。

三浦は庭の方から一人で歸つて來た。さうしてつかつかツと彼女の傍へ近寄つて來て、後ろを振り向きながら輕く挨拶をするやうに前身をかがめて、彼女の耳元へ小聲で囁いた。

「また十時だよ、今晩――」

彼女の顏は大風に吹きあてられたやうに顰められたまゝうち向いてしまつた。さうして彼女が再び顏を擡げた時は、美裝した惡魔の姿は見えず、その代りに彼女の良人が今までのやうに椅子へゆつたりと反り返つて、尖つた眼をぼんやりと天井へ向けて、そこへちらちら映つてゐる金魚鉢の水鏡の反射を眺めてゐた。

「莫迦になれなれしいな――」

彼は妻の方を見ないやうにして言つた。彼女は狼狽てて彼の方へ近づく樣子をして棚の裏へ廻つた。

「ええ――」

彼女は歩きながら齒痛でもするやうに、やうやうの思ひで言つた。

「あらあ、なんだらう、シネマホールの角のところの水菓子屋の娘をどうかしたといふ男だらう？　今庭の方で忠三がそんなことを言つてたよ。」

「どうなさつたのです？」

彼女は力强く言つて、彼の傍へ立つた。

「忠三に聞くといいよ。」

彼女は無言で外の方を見た。彼女の顏には悅びが湧きあがつて來た。彼女は一つの血路を見つけたやうに思つた。さうして三浦のその噂は眞實であらうと思つた。それが眞實であればあるほど彼女は力强くなつてくるのを覺えた。

「お前が心配するほどのことでもない。」

彼女には良人がぶつきら棒に言ふ、その言葉が二重の意味に解釋されないこともなかつた。彼女は何事も沈默してゐるべきであると思つた。彼女は急に何事もこはくはないやうに感じられることを不思議に思つた。さうして彼女の胸の扉のところでは囁くやうな聲がする。その聲は良人の聲であることはまぎれもない。――「默つてゐていい。おれがみな知つてゐる。こはくはないのだから安心して默つてゐていい。」――

彼女はそんなふうにこみ上げてくる悅びの聲を聞くと、つい涙が頰へこぼれてくる。彼女には何も見えなくなる。たつた一人愛する者のみが、彼女の手をぎつしりと握つてゐるその溫みがぞくぞくとするやうに胸まで感じてくる。彼女は力强く思ふ。かうして何にも言はずにぢつとして良人の顏を見詰めてみたいやうな衝動に馳られる。

彼女は眞實に良人の心持が、彼女自身の想像してゐるのと寸分も違はないと思ふ。が、一方では良人が默つて口を噤んでゐるのがもどかしいほど憎くも感じられる。さうして彼女はまたしても良人へ向つて、三浦のことを打開けようかと煩悶する。しかし彼女は、彼との關係に就いては最後まで胸のなかへ押へて置いて、彼女自身が今夜の十時になればそれを見事にかたづけてしまへると自負心を固める。が、彼女は彼女自身の心の生活を他人のことのやうに賴りなく感じた。

――――

夕方になると、小汀は散歩へ出かけた。さうしてその出かける時に――「明日にでも旅行をしよう。」と言ひ出した。

彼女は彼の考へてゐることが少しも解らなくなつた。彼は彼女の困つてゐることを少しも知らないのだらうか、それとも十分に知つてゐて、あんなことを言ふのであらうかと、彼女は思ひ惑うて見なければならなかつた。さうして彼女は彼女自身の危機をすでに良人へは打開けてしまつてあるやうに感ずる。さうして彼女は良人の出て行くのを止めなかつたことを後悔した。一體旅行すると言つても、この忙しい季節に彼

等二人は共に旅へ出るのか、それとも彼一人で出かけるのかと彼女は訊ねてみるべきであつたと考へた。彼一人で旅行するのであるとすれば、彼女自身は一たいどうなることであらうか。さうしてそれとも彼は彼女のことは十分飲込んでゐるから安心して出て行くのか、それとも彼は彼等の以前の關係を知つてゐるから、何か都合の好い考へでも浮んで彼等をとつちめる用意をするのであるか。かういふことは、彼女としても一應は思ひ浮べて見た。しかし彼女は闇の井戸の中で藻掻くやうに彼女自身の心身を痛めるばかりであつた。さうして彼女は彼女自身でつくり出す幻想のなかに煩悶しつづけた。また彼女は、心のなかに湧いた考へを口にしなければ、それは人へは通じはしないといふことを大へんにもどかしく思ふこともあつた。なほ彼女は、清澄と怜悧と決斷との三つを缺く彼女自身が情なく悲しくなつて來るのであつた。さうしてさういふやうに思ひつめて行けば行くほど、彼女は彼女自身が正當の地位にゐるか否かを疑はなければならなかつた。彼女は彼女自身の短くもない過去のことを顧みて見る。さうして忘れようともせずに、胸の片隅へ押しやられてゐた考へや感情に捉へられてしまふのであつた。さうして彼女自身の心の沈んで行く反動で——「ウキリアム」——と、慾望のやうな言葉に狂氣じみた聲で叫ぶのであつた。が、彼女は花の香に醉うてゐる彼女自身を見出して、うつとりした氣分になつてしまひ、もとのつつましやかな婦人になるのであつた。

五

彼女が三浦の勝手に取り定めた約束を履行しまいと決心したのは、十時を三十分も廻つてゐた頃であつた。それに小汀の歸宅する時刻でもあつたので、彼女はなほの事その決心を飜すまいと心に固く誓つた。その時彼女の耳は、庭の奥の方で人聲がしてゐるやうに感じた。彼女は瞬間的に三浦が巡廻の警官にでも詰問されてゐるのかも知れないと思つた。と、その次の瞬間、犬の苦しむ時のやうな叫び聲が、むツと響いた。それ切り何も物音が聞えなかつたが、彼女は急に胸騷ぎを感じはじめた。それが何故であるか、彼女自身にもはつきり言へないほど、せはしく、恰も豫想してゐたことが現在目前へ迫つて來たかのやうに、彼女の胸のなかは掻き廻されるまに波打つた。彼女の顏は自然と赤く火照りはじめた。さうして彼女は息苦しく、呼吸の切迫して來るのを感じた。彼女はのめつて倒れさうになつた。頭の心がづきづきと疼くやうにも覺えた。が、何ごとも一切が、彼女には解らなくなりはじめた。それでありながら彼女にははつきりした頭腦が働いてゐるやうにも感じられた。

彼女は半ば夢中で戸外へ飛び出した。外は薄暗い紫色の霧でもたてこめてゐるやうに、ぼんやりとかすんでゐた。さうして夜の空の壁には、浮きあがつた星が幾つも幾つも重なり合うて輝いてゐた。彼女は内で聞きつけた叫び聲の方へ見當をつけて、跫音を忍ばせながら小刻みにしかも足早に近寄つて行つた。彼女の身邊へはいちじに花の香が襲ひかかつて來た。彼女は出來るだけ心を平靜に落着けて、何事もないやうにと半ば祈りながら一ぱん奥の池の端に近い花壇のところまで出た。彼女が蹌踉けるやうに蹋む時、その顏へ蜘蛛の巣のやうなものがべつとりと觸れて、チューリップの葉がぴんとその横頰を掠めた。

彼女は柔い土壤へ足の裏が喰ひ入るやうに蹋むだまま眞黑な影が音もなく動いてゐるのを見定めた、その影の姿は苦しさうに何ものかを引摺つてゐた。白く輝く細いものが、彼女の瞳へ流れて來た。彼女にはそれがカラーのやうにも見えた。さうしてだんだんと薄暗に馴れかけた眼で見ると、その影は彼女の良人であつた。彼女はあツと叫ぶ聲を咽元で食ひしめて、ぢつと身内へ力を入れて固くなつた。さうして引摺られてゐるものは、一人の人間であつた。彼女は直感的にそれは三浦であるに違ひないと思つた。彼女は顫へる軀をどうすることも出來なかつた。彼女には彼女自身の乳房が萎縮しながら一秒一秒に凝結して行つて、軈ては皮膚を裂き、肉を食ひ、血管を堰止め、肋骨を割り心の臟へまで吸ひつきさうに感じられた。さうして彼女の瞳はそれだけのことに最早苦痛を訴へるやうに朧ろにかすんで來た。彼女の齒は、顎の顫へで小刻みにかつかつと鳴りつづけた。耳はぢ、ぢ、ぢと空鳴りをして、胸の動悸とともにその加速

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com